



Title	臨床哲学のフィールドをつくる : 科学のモード論をヒントに
Author(s)	中岡, 成文
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 5-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

臨床哲学のフィールドをつくる

——科学のモード論をヒントに

中岡成文

大阪大学文学部に臨床哲学研究会が発足して三年が経とうとしている。1995 年 11 月の第 2 回研究会で私は「臨床哲学はどのようなフィールドで働けるか」について発表したことがある。その折りにあげた職種は看護、教育、ソーシャル・ワークなどであった。看護と教育については、その後じっさいにその関係の方々が研究会に参加し、発表もしてくださったので、臨床哲学とのつながりはいわば実証されたといっていいただろうし、ソーシャル・ワークについてはこれからでも接触していきたいと考えている。しかし、臨床哲学のフィールドを展望するうえでは、既成の職種にアプローチして接点を探るだけではなく、日本（そして多くの「先進国」）の文化構造や社会構造の急激な変化をしっかりと認識し、中長期的な見通しの中に臨床哲学の役割を位置づける必要がある。それでこそ、臨床哲学の自己理解も深まり、他のさまざまな動きとのインタラクションのうちで、新しいフィールドを共同でつくり出すことにも成功するだろう。

さて、私たちを取り巻く文化構造・社会構造の変化を知るよすがとして、ここでは、科学のモード論を取り上げてみたい。モード論は、マイケル・ギボンズ編『現代社会と知の創造——モード論とは何か』（小林信一監訳、丸善ライブラリー、1997 年）において展開されている。この本は昨年の後半（原著はすでに 94 年にスウェーデンで出ているが）に出版されたばかりで、今のところ大きな反響を起しているとは聞かないが、先に述べた文化構造・社会構造の変化を教えてくれる点で私にはとても啓発的だったので、私が理解し、また臨床哲学の発展にとって有益と判断したかぎり、その趣旨を以下に紹介する。ただし少なからず私の側のコメントや体験をさしはさみ、パラフレーズしていることをお断りしておく。

モード論は、ギボンズを始めとする数人の科学者たちがスウェーデン研究計画調整評議会の援助で取り組んだプロジェクトの成果である。そのキーワードは、知識生産の新しいモード（様式）である。大学を中心に発展してきた伝統的な科学（ディシプリン）はモード 1 と呼ばれる。それに対し、現在台頭しつつある新しい科学

の形態は、個別のディシプリンを横断した（トランスディシプリナリ）もので、モード2と呼ばれる。モード2の主な特徴をあげてみよう。

（a1）差し迫る問題にコミットする

これまでの科学のイメージといえば、その専門がめしより好きな学者さんたちが寄り集まり、素人には意味不明の研究に没頭して、結果的にそのいくつかの成果が「応用」され、社会のために役立つこともあれば、ぜんぜん世間離れして趣味的なものも多い、というものであろう。さしずめ哲学・倫理学を始めとする人文科学は、「応用」不可能で、「役に立たない」研究の代表格だろう。近年は応用倫理学が登場して、文明の行方を左右する実践的な問題にコミットしてはいる（環境倫理、生命倫理など）が、これはこれで基礎と応用との区別から出発していることに疑問が向けられている（臨床哲学の側からもそれはたびたび指摘されてきた）。

これに対して、モード2の知識は、もはや純粋科学と応用科学との区別をせず、「アプリケーションのコンテキストで」生産されるという。この言い方はあまりわかりやすくない。さりとて「最初から実用をめざして」いるのだと言い換えてしまうと語弊がある。むしろ、臨床哲学の場面に引きつけて、こういうふうに理解できないだろうか。

たとえば、哲学・倫理学で「自己」とは何かといえば、かなりの大問題であり、このテーマでさまざまな哲学者を引用し、長い論文が書けるだろう。それは従来のディシプリン型の研究である。もちろん、知的好奇心に駆られたこの種の研究もけって悪いわけではなく、それどころか臨床哲学の営みにうまく取り込むことでさらに生きてくる面がある。とはいえ、ケアの現場で、漠然とした形であれ、「自己とは何か」が問題とされるとき——それは尊厳死の決断をどう扱うかについて意見が対立したときかもしれないし、患者さんのどの＜意志＞を尊重するのが正しいのか看護者が迷うときかもしれないし、不登校の子にどう向き合うか親や教師が悩むときかもしれない——、ディシプリン型の知は現場で働いている人々の助けにはなりにくい。必要とされているのは、人間の自己を「永遠の相の下に」考察する深遠限らない哲学よりも、差し迫った、錯綜した、日々新たな顔を見せる諸問題に、「今ここ」で一筋の光を当ててくれるヒントだからである。もう一度いうが、学問的深さがいけないわけではもちろんない。それが背景になれば本当の説得力は生まれてきにくいだろう。ただ、現実コミットする、というより、自分は現実から迫られているという意識を最初から先鋭に持つことが大切だと思うのである。

(a2) 「解答」が新たな問題に気づかせる

ギボンズたちは、特定の解答が知の前進の根拠となるという（28 頁）。モード 2 は、そして臨床哲学も、パズル解きではない。ただひとつの「正解」に達すれば探求は終わるというものではない。たとえば、不登校という「問題」がある。私の知り合いの精神科医はかつて「登校すべきだ」という前提に立って、この問題にかかわっていたらしい。いまかれは不登校はいけないとは思わない。少年少女たちはゆっくり疲れを癒すべきだという。不登校が積極的にいいという意味ではないだろう。かれの問いは、どうすれば不登校は解決（解消）できるかという形から、「なぜ不登校はいけないのか」という方向に変わっていった。そして不登校に絡む多くの問題が新たに視野に入ってきた。

(a3) リニア・モデルの誤り

イノベーションのリニア・モデルはもはや（単純には？）通用しないとも、ギボンズたちは示唆している（36 頁）。リニア・モデルとは、基礎と応用という二分法に従った上で、「基礎がしっかりしている場合だけ、よい成果に結実する」という一方向性で研究の具体化を考えるものである。

さて、これはかなり微妙な問題であろう。たしかに臨床哲学にとって、伝統的な哲学・倫理学の勉強（というのは早い話、哲学書を読み、哲学的な概念を身につけること）というのはどこまでも重要であり続けるだろうと、私たちは信じている。ただそれは、本を読んだ分量だけ臨床哲学を前進させることができるという意味ではない。ケアの現場でいろいろ思い悩み、自分なりの発見を積み重ねていくことこそが、臨床哲学らしいひらめき、洞察を招き寄せるのだと思う。じっさいこれまでの研究会の発表を通して、すぐれたケア（気づき）の実践者は、またすぐれたケアの言葉のつくり手であることが明らかになった。たとえば看護のプロたちの気づきを哲学にフィードバックすることこそが、哲学に新たな局面をつくり出せるであろう。

もちろん、言うはやすい。ディシプリンとしての哲学・倫理学の中で育ってきた者たちと、ケアの従事者たちとが、それぞれの認識をすりあわせ、いっしょに臨床哲学を作り上げていくには、まちがいなく大変な時間とエネルギー、相互の寛容と忍耐力がいる。大阪大学大学院文学研究科で平成10年度から社会人入試が始まり、「社会人」の積極的な受け入れが始まることは、たんに実験というにはあまりにも

重い、張りつめたコミュニケーションの機会となるだろう。決意を名前で表すためにも、私たち倫理学研究室はこの4月から「臨床哲学」に衣替える。

(b1) 知の可動的ネットワーク

ギボンズらによれば、モード2では、知識の伝達の仕方も異なってくるといい、この点も臨床哲学にとってたいへん示唆的である。つまり、モード1の科学では、つくり出された知識は、制度的な経路（大学の授業、学会、専門の雑誌など）を通して普及したのであるが、モード2では、成果の伝達は「参加者が参加している最中に」、いいかえると「知識生産の途上で」行われるという。

これはまさに、私たちがこの三年間経験した臨床哲学研究会のセッションの様子そのものである。看護婦・看護師さん、高校の先生、音楽療法士の方、障害児のお母さんで「通信」を発行しておられる方、そして学生や院生たちが、それぞれに経験を述べ合い、質問し合う。もちろん私たちの交流の場にはまだ手探りが多く、知の成果の伝達形式としては未発達といわねばなるまい。しかし、この戸惑いは、大学中心主義にあぐらをかいていないからこそ出てくる。異質な活動者（アクター）たちの出会いと相互行為の渦巻きは、さらに回転を上げていくことによってのみ、その真価を実証するだろう。

ケアや心の問題に特権的な専門家はいないのだ。待ったなしで迫ってくる問題を本気で「解決」したければ、「衆知を集める」しかない。ただし、それは漠然とみんなが集まって考えるというのではなく、それぞれが自分なりの「科学」的切り口をふまえたうえ、それらをかみ合わせてみることを意味するだろう。

(b2) ハイブリッド・フォーラ（異業種参加のフォーラム）

知識生産における大学の独占はとくに崩れ、さまざまな知識生産（研究）の拠点が大学の外にも増え、それらが相互作用しているという（37、39 頁）。臨床哲学研究会に参加してくださっている上記の方々、たとえば大学に勤める研究者ではなくても、ひとりひとりがりっぱに独自の関心を持った「知の生産拠点」であるといえる。その方々が交流する研究会の場は、ギボンズたちのいうハイブリッド・フォーラ（フォーラは「フォーラム」の複数形）、つまりさまざまな職種・経歴・関心を持った人々が集い、語り合う広場だといえる。（フランスで話題を呼んだ「哲学カフェ」は、日本ではまだ東京あたりで少し試みられている程度のようなのだが、これも面白いフォーラの形だろう。誰か関西でもやりませんか？）臨床哲学研究会は

自らがこのようなフォーラとして成長するのはもちろん、他の意欲的なフォーラとの関係も求めていくことになるだろう。

一同に集まり互いの顔を見合うフォーラももちろん重要だが、現代社会ではさまざまなメディアを通したコミュニケーションをうまく活用しなければならない。いわば距離や時間差のあるフォーラである。現に私はインターネットのおかげで、欧米の臨床哲学（「哲学カウンセリング」）の情報を得たり、代表者とメールを交換したりすることができる。マス・メディアともうまくつきあっていきたい。本号には新聞に載った臨床哲学関連の記事も集めてある。臨床哲学の「ことば」を練り上げるのはもちろんだが、テレビでの紹介にも備えて、映像や音声を含めた多次的な発信形態を意識して開発することが望ましい。

（b3）協力と競争

ギボンズらはまた、知識生産における管理者は、以前のように内部資源を管理するにとどまらず、しだいに「外部との境界」を管理することに、さらには「外部の環境」を管理することに向かっているという（125 頁）。つまり、（管理者であるかどうかはともかく）私たちは類似のモードで動き始めている他のグループや組織と複雑なゲームを行わなければならない。ゲームのパートナーたちとはあるときは協力し、あるときは競争することになる。

これは現時点での私の不確かな推測にすぎないが、私たちが文学部で始めた臨床哲学の運動や組織づくりと、新たに設立されつつある看護系大学院とは、ちょうどこのような協力と競争という流動的な関係を持つことになるのではないだろうか。臨床哲学にとって、看護（やたぶん介護）ケアは有力なフィールドであり、すでに接触しつつある分野である。今までの医療／福祉の枠を超えて、また看護という固定的領域を持つ仕事のたんなるヴァリエーションということでもなく、人間存在そのものがつねにケアし、ケアされている存在だということは、私たちのもっとも大切なアピールのひとつだろう。しかし、だからといって、臨床哲学が新しい主導権をとることをねらうべきではあるまい。複数のセンターがあって、互いにいい意味での競争心は持つべきだが、ともかく自己保存・自己拡張に走ってしまうと、かえって共倒れになると思う。

（c）外部者への説明をうるさく思わないこと（アカウンタビリティー）

聞き慣れないかもしれないが、最近、企業倫理（職業倫理）などでアカウンタビ

リティーという概念が出てきた。対外的説明責任といえはわかりやすいだろう。たとえば、国民の税金を使って何か事業をすれば、その使途や意義について説明する義務がある。これは経済的アカウンタビリティーである。それに対し、ギボンズたちが強調する社会的アカウンタビリティーとは、研究の開始の段階（問題設定、優先順位の付け方）からその研究の社会的インパクトに敏感になることである（31頁）。科学技術を含めて、専門家たちはこれまで以上に、「日常語」で、一般の人々とコミュニケーションしなければならない（77頁）。

これは慣れないうちは、とかくやっかいに感じられるだろう。私は倫理学もアカウンタビリティーを自覚すべきだと考え、科学研究費補助金にこのテーマで応募したが、科研費の申請書類を書くこと自体も（さしあたり経済的）アカウンタビリティーの一種であろう。内部の論理や仲間同士の合意だけでなく、外部の人はどう受け取るだろうという感受性を持つことは、ますます必要になってくると思う。

最初にお断りしたように、これはモード論のバランスよい説明にはなっていない。とくに、モード2がいまやすべてで、モード1はもう旧く、廃棄すべきだというわけではなく、両者の補完性が説かれていることには、おそまきながら注意を促しておいた方がよいかもしれない。

今あげた問題を含めて、モード論に対する疑問はいろいろあるだろう。知識の市場性ということをギボンズたちはいうが、それは商業主義とどう一線を画せるのか。最近クローズアップされている非営利団体（NPO）は知識生産との関連でどう位置づけられるのか。ともあれ、こういった疑問をも含めて、モード論は知と経験のネットワークをめざす臨床哲学にとっていいヒントを与えてくれるのはたしかだと思う。新たなフィールドは私たちが積極的に開拓していかなければならない。